

企画・制作/福島民報社 広告局

とうほくの未来に、想い新たに。

三菱商事は、東日本大震災の復興支援のため三菱商事復興支援財団を設立し、被災地の状況やニーズに合わせて様々な活動を展開してきた。2015年には郡山市逢瀬町に「ふくしま逢瀬ワイナリー」を竣工。果樹農業の6次産業化という地域の新たな事業モデルを構築し、10年目を迎えたこの春、新たなステージへと歩みを進める。フルーツ王国ふくしまのおいしい果実の可能性を広げ、上質なワインづくりに尽力してきた関係者の思いやこれからの展望を紙面で紹介する。



三菱商事復興支援財団 代表理事 野島嘉之氏インタビュー



東日本大震災の被災地へ 基金創設・財団設立で支援

2011年の東日本大震災後、三菱商事グループの社員延べ4958人が2020年度までの10年間、ボランティア活動に参加し、私も震災直後に被災地に入り作業に加わりました。大量のがれきを前に、どうやって復旧・復興していくのか途方に暮れる思いがしたのを覚えています。同年4月に総額100億円の「三菱商事 東日本大震災復興支援基金」を創設、2

012年には基金の事業を一部継承し「三菱商事復興支援財団」を設立しました。基金から継承した2つの事業「学生支援奨学金」「復興支援助成金」に加え、被災地の経済復興に向けた「産業復興・雇用創出支援」を開始し、東北の企業50社を支援。このうち約9割は現在も企業として存続しています。

「ふくしまワイナリープロジェクト」始動

震災から3年が経過してもなお、原発事故の影響で農作物への風評被害が強く残っていました。こうした状況を受け、財団は福島県での支援事業の検討を開始。農産物や地元ブランドの付加価値を高めることを目指し郡山市と連携協定を結び、2015年2月に「ふくしまワイナリープロジェクト」をスタートし、10月に「ふくしま逢瀬ワイナリー」を竣工しました。福島県で生産される果実を

原料とする酒類等を醸造・加工し、果実生産者、地元自治体とともに新しい農業の6次産業化を構築するモデル事業です。

「ふくしま逢瀬ワイナリー」のこれから期待

当初から、このプロジェクトの最終目標はこのワイナリーを地元の企業として自走させていくという事でした。事業が軌道に乗るまでのフェーズは私たちが中心となって運営し、将来的には復興支援というのではなく、地に足のついたビジネスとして運営していくことが本場の復興、永続的な産業創出に繋がると考えていました。4月以降ワイナリーの事業を継承されるISホールディングス様は、県内で観光事業を手掛ける子会社をお持ちで、様々なリゾート・観光施設とも連携しながらさらなる発展を遂げていくと確信しております。

「さらにも多くの人がワインづくりの魅力を感じてくれるような体験型ワイナリー」として充実を図りたい。レストランやワインの熟成庫など、スタッフとともに新たなチャレンジができる施設の計画も視野に入れている」と、先を見据える。

ようやく10年。新たな可能性にも挑戦

果産果実へのこだわりが オリジナリティーを育てる

地域に根差した取り組みからスタートした「ふくしま逢瀬ワイナリー」は、人とのつながりを大事にしながら10年という大きな節目を迎えた。栽培に関わる農家や醸造家の苦労を間近に見てきた代表理事兼営業責任者の大河原尚尚さんは「果産果実にこだわったワインづくりの6次産業化は様々な難しさがあつた。近年はブドウの生育も良く、広い郡山市ならではの地域性を生かした個性派ワインにも積極的に取り組んでおり、その結果が出ています」と手ごたえを語る。これまで、ワイナリーのコンセプトや商品のポートフォリオ、デザイン考案、県内外へのPRに



果産果実にこだわった個性派ワインを醸造するために、こだわりたいと話す大河原さん。

も注力してきた。「目指すのは、ブドウ本来の力を引き出すワインづくり。そのためにも、良質なブドウを栽培し、そのブドウを生かす醸造が重要」と力を込める。

体験型ワイナリーとして 観光拠点としての活用も

ワイナリーでは、地元の小中学生

や高校生がブドウの収穫体験や醸造見学を行い、見て触れて身近に楽しむイベントを定期的に行っている。4月からは、地域観光の活性化を目指すISホールディングスが施設の運営を担い、福島県新たな観光拠点としての活用も期待される。

「さらにも多くの人がワインづくりの魅力を感じてくれるような体験型ワイナリー」として充実を図りたい。レストランやワインの熟成庫など、スタッフとともに新たなチャレンジができる施設の計画も視野に入れている」と、先を見据える。

フルーツ王国の魅力をも 全国、そして世界へ発信

事業には多数の果樹農家が原料を供給し、また、ワイナリーブドウの栽培という新たな挑戦にも取り組

組んできた。現在は地元産のブドウをはじめ、県内産の桃やリンゴ、梨を使用したワインやシードル、ブランデー、リキュールも製造している。「自分たちが育てたブドウがおいしいワインになるのを楽しみにしてがんばって育てている契約農家の皆さんの思いに応えたい。また、ワインだけでなく福島県産の様々な果実の魅力を世界に発信し、県内はもとより世界中の関心を集めるワイナリーを目指したい」と覚悟を示す。



多様性もワインの魅力

まほゆい輝きを放つタンクが並び醸造所。この場所で醸造責任者を務め、日々、試行錯誤を繰り返しているのが松尾弘則さん。ふくしま逢瀬ワイナリーでは、13人の契約農家がワイナリーブドウの栽培に励む。面積が広い郡山市は、場所によって気候風土に違いがあり、仕上がりにも多様性が生まれる。ワイナリーにはスタンダードがな



香りを感じ、ワインの出来を見極める 松尾さん

く、毎年味わいが変わってくる。醸造家として、臨機応変に対応してワインをつくる苦労こそが醍醐味」とほほ笑む。タンクは基本的に生産農家ごとに分けられ、試飲しながらどんなワインにするのかポートフォリオを決定する。同じ味を作れないのもワインのおもしろいところだという。今年新たにコンクリートのタンクを導入し、香りを大切に作る特徴を生かした製造にも取り組む計画だ。

清潔感あふれる醸造所に29基のタンクが並び



三菱商事復興支援 活動の軌跡

1st phase 2011年～
2011年4月 「三菱商事 東日本大震災復興支援基金」創設
三菱商事が総額100億円の基金を創設し全社を挙げた支援を開始。大学生への奨学金、NPO・NGOへの助成金等を開始

2nd phase 2012年～
2012年3月 三菱商事復興支援財団設立
より広範で柔軟な支援を行う母体として財団設立。奨学金、助成金事業を引き継ぐとともに、被災地の産業の復興と働く場の確保に向け「産業復興・雇用創出支援」を開始

3rd phase 2015年～
2015年2月 「ふくしまワイナリー」竣工
郡山市と連携協定を結び、地元の果実を使った酒類等の製造販売を行う「ふくしま逢瀬ワイナリー」を竣工し、新たな地場産業の創出を目指す。農業6次産業化支援を開始



2019年3月 「郡山産ワイン」完成
郡山産のブドウを原料とする郡山産ワインが完成
2024年12月 郡山市とISホールディングスが事業の運営継承に向けて賃貸借契約を締結
2025年4月 ISホールディングスによるワイナリーの運営開始

CHEERS!



福島の未来に 願いをこめて、新しいスタートに 乾杯

本日の福島民友11面と合わせてご覧ください。



郡山市農林部 次長兼園芸畜産振興課長 山内 勝則氏

東日本大震災からの本県の農業復興に向け、三菱商事復興支援財団と郡山市が連携し、果樹農業の6次産業化プロジェクトに取り組んできました。風評被害もあり県産の農産物は深刻な被害を受けました。比較的影響の少ない加工品に着目し、県内産のブドウ、桃、梨、リンゴを使ったワインやリキュール等を造るワイナリーを建設し、本県が誇る果物

6次産業化で、ふくしまの農業復興へ

の魅力発信を目指しました。ブドウなどを栽培してくれる地元農家の協力を得るため、財団の皆さまと一緒に事業計画を根気強く説明して回りました。果樹の育成やワイン加工に適した苗木の導入や栽培方法の助言などを通じ、生産者の支援に力を尽くしました。近年はワイナリーのシールドルやワインが様々なコンクールで受賞を重ねており、評価が高まっていることを誇らしく思っています。



ISホールディングス 代表取締役社長 遠藤 昭二氏

ワイナリーは地域観光の心臓部

値を、生産者の皆さまとの信頼関係を含めてしっかりと継承していきます。誘客に向け、大人から子どもまで、ワイナリーの醸造や蒸留の装置を間近に見て仕組みを学習できる環境を整えたいと考えています。また、いずれは食事を提供する機能も備え、県中地方で飲食できる場としても活用頂き、地元の方を含めて公園に遊びに行くような感覚で訪れてほしいです。県産フルーツを使った製品価値や品質を高めるとともに、材料の調達を進めてワイナリーの稼働率を上げ、売上高を3倍まで引き上げる目標です。まさに熟成して価値を増すワインやブランデーのように、ワイナリーの可能性を一層高めたいです。